

南会津町青少年の主張大会



小学生の部

賞	氏名	学校名	学年	題名
最優秀賞	大山 遥仁 ^{はると 遙仁}	館岩小学校	6年	A Iにはない人のみ力
優秀賞	佐野 琳音 ^{りおと 琳音}	伊南小学校	6年	命を育てるということ
	近藤 来愛 ^{くれあ 来愛}	南郷小学校	6年	言葉のつまったその先に
	室井 慶嗣 ^{けいじ 慶嗣}	田島小学校	6年	夢のためにできること
奨励賞	渡部 陽太 ^{はると 陽太}	田島第二小学校	6年	I LOVE 南会津大作戦
	星 結芽 ^{ゆめ 結芽}	松沢小学校	6年	骨折してわかった優しい心
	土屋 夏乃 ^{かの 夏乃}	荒海小学校	6年	将来の夢

中学生の部

賞	氏名	学校名	学年	題名
最優秀賞	鈴木そのか	田島中学校	2年	子どもたちが地域にとどまるために
優秀賞	星 凜咲 ^{りさき 凜咲}	荒海中学校	3年	ブラック校則を減らしていくために
	星 綾香 ^{あやか 綾香}	田島中学校	3年	親子のつながり
	脇坂 心捺 ^{こころ 心捺}	南会津中学校	3年	賢く使おう
奨励賞	酒井 陽菜 ^{はるな 陽菜}	南会津中学校	3年	「食べる」こと
	高橋 夢雪花 ^{ゆめか 夢雪花}	館岩中学校	3年	私の走る道、これからの歩み
	八木橋 真汐 ^{ましろ 真汐}	荒海中学校	3年	A Iとこれからの私たち

高校生・青年の部

賞	氏名	学校名	学年	題名
最優秀賞	湯田 姫琉 ^{ひめる 姫琉}	南会津高等学校	3年	地域の誇りを守り、育て、未来へ引き継ぐ
優秀賞	志賀 ゆめり	南会津高等学校	2年	私の世界が広がっている
奨励賞	弓田 優来 ^{ゆうら 優来}	南会津高等学校	3年	広がる絆、つながる地域
	河原田 海斗 ^{かいと 海斗}	南会津高等学校	2年	南会津から世界へ

7月5日、令和8年度南会津町青少年の主張大会を御蔵入交流館文化ホールで開催しました。
町内の小・中・高校から計113名の応募があり、学校推薦による18名が発表会に出場しました。

出場した18名の主張の題名をここで紹介するとともに、各部門で最優秀賞に輝いた3つの主張を、原文のまま掲載します。

また、幕間には、アトラクションとして石森禎枝さんによるアイリッシュハープの演奏が行われ、美しい音色で会場を魅了しました。



【問合せ】 生涯学習課 生涯学習係 電話 0241-62-5511

「オーケーグーグル。今日の南会津町の天気は？」僕の家では、このフレーズが日常茶飯事だ。問いかければ、A I（人工知能）はすぐに、正確な答えを返してくれる。膨大な情報を持ち、一瞬で疑問を解決してくれるA Iは、現代の僕たちにとって、なくてはならない便利な存在となっている。しかし、ふとした時に不安になることがある。何でもA Iに頼り、答えだけを求めることが当たり前になってしまったら、僕たちは大切な何かを忘れてしまうのではないだろうか。

例えば、学校で困ったことがあったときだ。A Iなら、最短の解決策を教えてくれるだろう。しかし、友だちは違う。一緒に悩んだり、時には意見がぶつかってケンカをしたりすることもある。以前、僕は友だちとさ細なことでケンカをしてしまったことがある。気まぐずい沈黙が続き、A Iに「仲直りの方法」を聞けば、きつと正しい手順を教えてくれただろう。でも、勇気を出して行動したのは僕自身だった。僕は友だちの前に立ち、まっすぐ相手の目を見た。自分の心臓の音が聞こえてきそうだった。ドキドキしながら「ごめんね」と伝えた。すると、相手の表情がふっと和らぎ「こちらこそ、ごめん」という言葉が返ってきた。ケンカは無駄なものかもしれない。けれど、仲直りをする過程で相手の気持ち想像し、思いやることで、絆は深まっていく。この「感情のやり取り」こそが、A Iには真似できない人間ならではの心の交流だと思う。無駄だと思ふことの中に、人と関わることの本当の価値があるのではないだろうか。答えがないからこそ、自分で考え

て、もっと友だちを思いやることのできるようになった。
また、僕には忘れられない感覚がある。幼い頃、怪我をしたりお腹が痛かったりしたとき、母が「痛い痛い、飛んでいけ」と言いながら、そっと手を当ててくれたことだ。普通に考えれば、手を当てただけで治るわけがない。それでも、不思議とお腹の痛みは引いていき、心まで軽くなった。それは、母の「治ってほしい」という温かい優しさが、僕に魔法をかけてくれたからだと思う。画面越しに情報をくれるA Iは便利だけれど、誰かの手の温もりや、震える声に寄り添うことはできない。人と人との直接ふれ合うことには、どんな最新技術もかなわない、不思議な力があるのだ。

もちろん、僕はA Iを否定するつもりはない。これからも上手に活用し、生活を豊かにしていきたい。けれど、便利な道具に依存して、努力することや相手を深く思いやることを忘れてしまいたくはない。A Iの知能と、人間の心の温かさ、それらの両方を大切にしながら、僕はこれからも、目の前の人と人とのつながりを大切にしていきたいと思う。



館岩小学校6年
大山 遥仁 さん



田島中学校2年
鈴木 そのか さん

この南会津町は豊かな自然と伝統文化などの魅力がたくさんある地域です。皆さんは南会津の魅力といえば、どのようなものを想像しますか。とてもおいしい南郷トマトや、新鮮でまっすぐに育った風味豊かなアスパラガスなどの農産物。そして、全国に誇れるいくつかの有名な酒蔵があります。夏には伝統ある祇園祭が町を活気で満たし、冬には極上の雪質と多彩なゲレンデ構成の四つのスキー場で県内外の多くの人を魅了しています。これらの素晴らしい「食・観光・四季折々の美しい景色・伝統文化」は私たちが未来へ誇るべき南会津町の最大の財産です。しかし、この素晴らしい魅力をもつこの町も、現在は深刻な人口減少という大きな課題に直面しています。

五月下旬に、私の学校に福島県企画調整復興・総合計画課の方が来校し、「ふくしまのミライ」について考える機会がありました。福島県、そして南会津町の現状について学ぶうちに、「人口減少」に対する危機感がよりいっそう高まりました。南会津町は高齢化・少子化が進み「令和六年の合計特殊出生率は1・20%となっており、人口を維持するのに必要な水準を大きく下回っている」と第三期南会津町子ども子育て支援事業計画に表記されていました。また、「南会津町高齢者保健福祉計画」の中の高齢者の生活実態アンケートの調査結果で、一人暮らしが16・8%、夫婦二人暮らし（配偶者六十五歳以上）は35・4%とあり、ここから一人暮らしのお年寄りが増えているということがわかります。

した。これに対して、若い世代はどうかというと、高校進学を機会に会津若松市や県内外へと転出していく傾向があります。さらに、高校を卒業すると地域に残る人は一握りとなつていきます。

そこで私は、「いつか必ず戻ってきたい」と思える町づくりをしていく必要があると考えました。これを実現するために、今の私にできることは、南会津町の魅力を地域や町だけでなく、私たち若い世代が協力し、SNSなどで広い世代に向けて発信し、地域ファンを増やすことだと考えます。例えば南郷トマトを活かした新商品の開発や、だいくらスキー場の通年観光化など、デジタル技術や若者の感性を活かした新ビジネスに挑戦できる町にしていくなのはどうでしょうか。そして私たち若い世代も、地域の行事も積極的に参加し、人と人とのつながりを大切にし、していくことが大切です。故郷が「夢をカタチにできる場所」になれば、若者は必ず戻ってきます。また、南海トラフ巨大地震を見据えた「様々な地域からの避難者を温かく受け入れる町

づくり」が必要です。災害に強い内陸部というメリットを生かし、防災拠点の整備や備蓄の強化を徹底し、被災した人々が安全に避難できる体制を今から築くべきだと考えます。誰もが不安な避難生活乗り越えられるよう安心で安全な街を私は強く望みます。多くの避難者を温かく受け入れ、誰もが「ここなら安心・安全だ」と思える、優しく強い南会津町を、決して大人任せにせず、私たち若い世代も一緒になって創り上げていきたいと思うのです。

大人が思いつかないような自由な発想で、町の未来を描く「想像力」。そして、これからの街として実際に具現化していく「創造力」。この二つの力を原動力に新しい未来を、大人と共に創り上げていきたいです。誰もが心から安心・安全だと思える強く優しい南会津町を目指したいです。私たちの描く「想像力」が、この町の新しい明日を「創造」していくのだと心から確信しています。そのためには私たちは地域について学び続けていこうと思います。

「GI南会津」この称号は、南会津町の風土が育てた日本酒である証です。町単独での指定は全国初という快挙で、豊かな自然と文化の象徴でもあります。

私の家では、林業と農業を営んでいます。父は私たちが幼い頃から「森が豊かなら、水も農地も、そして海も豊かになる。だから、森を守る人が必要だ」と言いつづけ、兄とともに林業を行っていました。また農業は、28haの水田を管理しており、そのうち8haで酒造好適米「夢の香」を生産しています。新酒の時期になると祖父は、「南会津の日本酒はうまいな。うちの米の出来が良かったからだな」といつも嬉しそうに話します。手伝う私まで職人になった気分になり、私も「伝統の味」を支えたいと強く感じてきました。「GI南会津」に指定される日本



南会津高等学校3年
湯田 姫琉 さん

酒には、厳しい条件があります。「南会津町で栽培された米と水のみを使用し、南会津町で醸すこと」。この条件を満たし、審査会を通過したものだけが、その称号を得られます。地元の国権酒造、細井さんに伺うと、南会津町は江戸時代から酒造りが盛んでした。冬に交通が遮断されがちだったため、地域の人々が試行錯誤し、自らの食文化に合う酒を造り上げてきたとのことでした。このおいしさを育むのは、森が磨いた「超軟水」と、冬の低温環境です。しかし、何より大切なのは原料の米です。「美味しい水や腕の良い杜氏がいても、米が悪ければGIにはなれない」という細井さんの言葉に、私は米農家としての責任の重さを再確認しました。

一方で、現在の南会津町は深刻な人口減少問題があります。農林

業だけでなく、酒蔵でも杜氏の担い手不足が深刻化しています。そこで今、酒蔵では経験や勘に頼るのではなく、温度や発酵プロセスをデータ化することで、若手社員であっても、熟練の杜氏が作る味を再現できる酒造りに挑戦しているそうです。この「データの活用」という考え方は、まさに私が目指すスマート農業の姿であり、深く共感しました。農業も、長年の「勘」に頼るのではなく、データを活用して病虫害防除や施肥、温度管理を行う。そうすることで、若者であっても、高品質・高収量を維持することが可能になると確信しています。

そこで私は、今年は「夢の香」の生産に本格的に取り組むことを決め、祖父にその決意を伝えました。「米作りはそんなに甘くないぞ」という厳しい言葉を背負いながら、春の播種から手間と時間を惜しまず稲と向き合ってきました。若者がデータに基づいて美味しい酒米を作り、その米を使い、酒蔵がデータを駆使して最高の一滴を醸す。この「データによる技術のバトン」こそが、これからの南会津町には必要不可欠なのです。さらに私は、「地場野菜」の栽培にも挑戦します。鍵となるのは、酒造りで生まれる「酒粕」で

す。地元には、酒粕を秋に施肥し、冬の間に熟成させて栽培に適した土壌をつくる。先駆的な「循環型農業」の知恵があります。この循環が生み出す価値を、さらなる魅力として伝えたいと考えています。そしてその舞台は、「会津田島祇園祭」です。観光客に向け、新たな郷土料理を提案します。大人には、酒粕肥料で栽培した旬の野菜を使った「はっとう」を現代風にアレンジした一皿で「GI南会津」との最高のペアリングを演出します。子供たちには、野菜の甘みを活かした「酒粕デザート」を。幼い頃から地域の宝の味に親しみ、未来のファンを育てる。こうした活動こそが、私の考える「担い手」のあり方です。

私にとって「担い手になる」とは、単に家業を継ぐことではありません。地域の誇りを守り、新たな技術と価値を加えて、次の世代に未来を渡すことです。「南会津の農業って、最先端で一番カッコいいんだ。」そう胸を張って言える未来を、私はつくっていききたい。兄が守る森の水、私がデータで育てる米や野菜、そして蔵元が繋ぐ技。これらを一つに結び、「GI南会津」をさらに世界へと広げていきます。